

夜間中学・神戸市立丸山中学校西野分校を学ぶ

Learn Kobe Municipal Maruyama Junior High School Nishino branch
which is nighttime junior high school

水 本 浩 典
Mizumoto Hironori

はじめにー0（ゼロ）からの出発ー

阪神・淡路大震災時に様々な必要から作成された紙資料（本稿では「震災資料」と呼称する）を研究テーマに設定したのは、2003年であった。以後、現在まで15年にわたって研究を継続している。震災資料へアプローチする手法は、それまでに培った史料学的研究手法を援用し、震災資料の調査・整理・保存・分析などを行ってきた。

2004年度からは、神戸市長田区役所内にある「人・街・ながた震災資料室」（以後、「震災資料室」と略す）が保存する様々な震災資料の整理と支援も行なうようになった。この活動は、今も継続して実施している（図1・2参照）。



図1 長田区役所3階会議室ある「人・街・ながた震災資料室」ドア写真

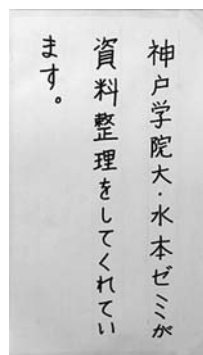


図2 ドアの張り紙を拡大

この震災資料室との連携は、筆者単独の研究活動を契機として始まったものではない。当時のゼミ生と取り組んだテーマが「阪神・淡路大震災」であったことに由来する。そして、被災地にフィールドワークに出かけたゼミ生のひとりが、長田区役所で震災資料展をやっていると報告したことに始まる。ゼミ生に導かれながら震災資料室展を見学したことが、以後、15年にわたる震災資料室との協働作業の始まりであった。

このようにして始まった筆者の震災資料研究は、開始の動機に規定されたことにも由るが、学生（ゼミ生・院生）と共に研究活動と学習活動を同時に行なう形態で実施してきた。通常の大学教員の研究は単に「研究」であり、共同研究と称する研究も、大学教員（研究者）が複数集まって実施する形態がほとんどである。そして、その成果を学生たちに教授することはあっても、学生たちと共に「学ぶ」活動は珍しいのではないだろうか。

本稿において公表する研究成果も、学生たちの「学び」と震災資料研究を結合した活動の延長線上にある。当然に教員である筆者が「指導」し、学生たちがそれを「学ぶ」という普通の形態ではなく、筆者も学生たちといっしょに、まさに「協働」して「学ぶ」ことを実施した報告である。

なかでも、本稿のタイトルになっている「夜間中学」については、筆者はまったくの門外漢である。

「夜間中学」という名称も聞き慣れない名称であった。夜間高校の存在は知っていたが、「夜間中学」とはどのような教育施設なのか、まったく知らなかったことを告白しなければならない。実は、震災資料室には既に早くから「夜間中学の大時計」が保存されており、毎年の震災資料室展には必ず展示されていた（図3参照）。筆者も、展示準備作業に携わった際は、この大時計を展示位置まで運んだ記憶はあった。しかし、それが何を意味し、何を発信する震災資料なのかについては、まったく関心がなかった。



図3 2016年度震災資料室展に出品された「神戸市立丸山中学校西野分校夜間中学 大時計」

今思えば、なぜ長田区役所で毎年開催される震災資料室展で、「夜間中学の大時計」が展示されるのか、そこに深い意味が存在したことがわかる。震災資料室が主催する震災資料室展は、区民を対象に震災資料を区民に開示し閲覧してもらうことによって、あの震災の記憶を共有するための企画であったわけであり、そこに展示される震災資料は、長田区という地域から切り離すことができない資料ばかりが展示されている。

保存用の大型の収納箱に上書きされた「神戸市立丸山中学校／西野分校 夜間中学」という墨書の意味も分からないままであった。そして、丸山中学校西野分校の場所もその歴史も知らない。その学校施設があった「三番町」という町名の意味も知らないままであった。

まさに、0（ゼロ）からの出発であった。

1. なぜ、西野分校を研究対象に設定したのか

2015年度「人・街・ながた震災資料室」の秋の恒例行事＝震災資料室展の企画案のなかに、テーマ展示「西野分校と震災」があった。このテーマ展示は、人・街・ながた震災資料室研究員（人文学部研究員も兼任）林田怜菜が担当した。

展示に使った資料は、現在、長田公民館で毎週続けられている識字教室・ひまわりの会の主催者桂光子が寄贈した写真資料である。桂は、地震発生の1995年1月17日当時、神戸市立丸山中学校西野分校（以下、西野分校と略す）の教員のひとりであった。西野分校は当時の神戸市立西野幼稚園（現在は別の場所に移転）の2階を使って開設され、45年近く続いた夜間中学であった¹⁾。西野分校が入っていた西野幼稚園の校舎は全壊し2月には全面解体される。震災の混乱と騒擾のなかで、西野分校の教職員と生徒が必死で自分たちの教育環境を取り戻そうとしている姿を記録した写真をもとに、桂自身が展示用に大きな模造紙に写真を貼り付け、手書きの注記を書き入れた資料が、展示の素材であった。そこに記録されているのは、震災のなかでも授業再開を願って西野分校に駆けつける生徒の姿、狭い校庭の一角にブルーシートを屋根代わりに張った「テント教室」で学ぶ生徒の姿などであった。

この展示は、口伝えなどによって関係者の見学を誘起し、多くの関係者や西野分校元生徒の来訪に繋がった。筆者及びゼミ生と西野分校関係者との接触が開始された瞬間であった。特に、既に西野分校を退職していた草京子、桂本人、現西野分校教諭井口幸治などとの出会いが、夜間中学を認識し、そのような教育施設とそこに学ぶ生徒の存在を認識する契機になった。



図4 2015年度 震災資料室展企画展「西野分校と震災」の様子

2. 震災資料から「学ぶ」

- ① 震災資料室が所蔵する西野分校関係資料がどの程度あるのか、調査を行なった。結果とし

て、桂が提供した写真資料及び西野分校が須磨区の太田中学校内に移転する際に寄贈された「大時計」以外にはなかった。

- ② 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター（以下、「人防」と略す）所蔵震災資料のなかに西野分校関係の資料が存在するか調査を行なった。結果として、まったく所蔵資料がないことがわかった。その他、神戸大学附属図書館震災文庫についても同じような調査をおこなったが、西野分校関係資料はなかった。
- ③ 須磨区の太田中学校に併設する西野分校に所蔵されている資料についての調査も並行して実施した。調査過程のなかで判明したのは、現西野分校がどのような資料を所蔵しているのか、全体像を把握することは困難である現状である。個人情報保護の名目のもと、調査自体を拒む姿勢が顕著で極々一部の資料を選別して提示されたに過ぎない。その多くは、西野分校が主催校となって実施した 2010 年の第 55 回全国夜間中学校研究大会兵庫大会の展示資料²⁾として使われた展示パネルであり、「兵庫県大会で展示したものだから、いいだろう（西野分校教頭の言）」ということで調査を許された。このように、現西野分校に西野分校の歴史をうかがうことができる関係資料がどの程度保存されているのかは、まったく不明な状態にある。

そのため、提示された保存パネルの作成者の使用許可を得ることなく、2016 年度の震災資料室展で撮影データを展示資料として利用することは、断念せざるを得なかった。

人防が 2001 年・2002 年と 2 年間にわかり精力的に被災地全域で震災資料の調査と保存のための集積を呼びかけ収集する段階においても、学校（特に、神戸市内の小・中学校）が保存している資料については、所在調査もできない場合が多くあったことがわかっている。西野分校については、人防による資料調査の手が及んだのかどうかは調べることができていない。

3. 人と人とのつながりから「学ぶ」

西野分校を中心テーマにした筆者のアプローチは、さまざまな関係者と放射的で貴重な関係を構築していくことになった。このことは、単に夜間中学をテーマにしたささやかなアプローチであったが、静かな湖面に小石を投げたように「つながり」を持つことができ、夜間中学・西野分校だけにとどまらず、兵庫県下の夜間中学（3 校）との関係、識字教室ひまわりの会との関係、夜間高校・湊川高校など、長田区番町地区という湖面に「つながり」という小波が広がっていくことになる。

①西野分校元教諭草京子氏とのつながりから「学ぶ」

夜間中学がどのような性格と歴史を持つ教育機関なのか、2016 年段階では門外漢に等しい状況下であって、草との出会いはその後の研究の方向性を指し示してくれるナビゲーターの役割を果たしてくれた。

夜間中学に関する基本文献の紹介、全国夜間中学研究会の存在など、草にとっては初歩的な情報であったであろうが、いずれもが筆者にとってその後の研究の方向性を決定づけるものになった。

(1) 夜間高校・湊川高校元教師登尾明彦氏との出会い

『湊川を、歩く』³⁾などを上梓している登尾との厚誼も、草によるものであった。これが、神戸学院大学地域長田センターでの聞き取り調査（2016年8月）として結実した。登尾は、単に夜間中学・西野分校に焦点を当てるだけではなく、もっと視野を拡げて長田区の北東に位置する番町地区という地域をしっかりと理解しなければ、西野分校を理解できないことを教えてくれた。

確かに、あの「夜間中学の大時計」という震災資料、桂が寄贈した震災真只中の西野分校の様子を記録した写真は、点としての西野分校に収斂する資料であるが、そのような資料が語る背景を理解するためには、番町地区そのものを理解していくことが最も重要なアプローチであることを深く認識する契機となった。

そして、登尾から同年9月にひょうご部落解放・人権研究所主催の「人権歴史マップ」連続セミナーで草が講演することを教えられた。

(2) 草京子講演「神戸の夜間中学校」（於：ひょうご部落解放・人権研究所）を聞く

2016年9月10日に開催された2016年度第3回目の草による講演は、神戸市における夜間中学設置の歴史的背景と経過について、群読という登尾が湊川高校文化祭などで生徒に演じさせた手法を使って、参加者と一体となったユニークな講演であった。この時点で西野分校と兵庫中学校北分校という神戸市にある公立夜間中学の歴史的な経過と背景を知る第一歩になった。

この講演に参加していた登尾から、同僚であった元湊川高校教諭山中勇を紹介された。この出会いが、湊川高校が17年間にわたって実施した地域と連携した「学び」を実現した湊川高校「国際交流事業」報告書へ目を向けるきっかけになった。

(3) 西野分校元事務員・木村康裕氏との出会い

草は震災当時の西野分校をよく知っている元西野分校の技術員・木村康裕を紹介してくれた。現在、神戸市総合教育センター職員として働く木村とは、同センターフロアで面談することができた。木村は、震災当時の西野分校の思い出のなかでとりわけ鮮明に記憶していたことを語ってくれた。それは、地震直後の西野幼稚園（全壊・危険立ち入り禁止）2階の西野分校から必死で書類を搬出したということであった。そのため校舎の管理責任者である当時の西野幼稚園長に激しい叱責を受けた、と。

当時の西野分校の教職員にとって一日でも早く授業再開にこぎつけるためには、全壊した校舎から日頃の授業関係書類などを全壊した校舎から搬出することであったらしい、と推測できた。

(4) 兵庫中学校北分校授業参観

現在、小・中学校は普通には関係者以外は学校内には入れない環境にある。これは、夜間中学においても同様である。そうした状況のなかで、草からの情報によって、兵庫中学校北分校の「公開授業日」に授業を見学することができた。

筆者にとっては、まさに初めての夜間中学授業風景であり、様々な国籍、様々な年齢層の生徒が夜間中学という場で、真摯に学ぶ姿を見ることができたことは、三番町にあった元の西野分校の授

業を想像することができる唯一の貴重な情報であった⁴⁾。

(5) 西野分校の 2016 年度文化発表会

西野分校は毎年秋に「文化発表会」と称して文化祭を開催している。2016 年度の「第 37 回文化発表会」は 11 月 4 日（金）に開催されることを教えてくれたのも草であった。筆者にとって初めての夜間中学の文化祭見学であった。現西野分校にとっても大きな学校行事であり、1 階の会議室に生徒の作品を集めた「作品展示」が、17 時 30 分からは太田中学校の体育館において「舞台演技」というプログラムであった。太田中学校 1 年生全員による合唱、本校である丸山中学校吹奏楽部の友情出演、そして、1 年生から 3 年生までの「舞台演技」があった。西野分校の生徒にとって日頃の勉強の成果を発表する場であり、自分自身の成長を確認する機会であることを知った。

② 湊川高校元教諭山中勇氏とのつながりから「学ぶ」

夜間高校・湊川高校で 35 年にわたって教鞭をとった山中勇との出会いは、①（2）の草の講演会会場で登尾に紹介されて初めて知遇を得る機会をもった。この山中との出会いが、山中が湊川高校の教員人生のなかで大切に保存してきた貴重な資料を提供してもらうきっかけになった。

(1) 震災当時の湊川高校（兵庫高校）避難所及び番町地区の状況写真

山中は震災当時の兵庫高校避難所の様子や被災して倒壊した家屋が連なる番町地区の状況を大量の写真として記録し保存していた（図 5 参照）。総数で約 700 枚にも上る貴重な資料である。



図 5 山中勇提供 写真資料

(2) 写真をもとに、当時の聞き取り調査実施

この貴重な震災関連資料をもとに、当時の指定外大規模避難所であった兵庫高校避難所の分析を行なっている大学院生中平遥香とともに、写真資料を肉付ける山中の「記憶」を記録化する作業を今も継続している⁵⁾。

(3) 湊川高校の国際交流事業（1993 年度～2009 年度まで、17 年間継続）の報告書。

湊川高校が兵庫県教育委員会の「国際交流事業」として採択された「いきいきハイスクール」活動関係資料（報告書の表題は「アジアをみぢかに感じよう」）の提供を受けた。この報告書を読み進める作業は、番町地区に隣接する湊川高校が具体化していった地域と連携した教育実践について理解する契機となった。



図6 『アジアをみぢかに感じよう』全17冊

③湊川高校元教員方政雄氏とのつながりから「学ぶ」

(1) 湊川高校避難所の聞き取り調査

登尾に対する聞き取り調査は、同じく湊川高校に35年間（正式教員となってからでも30年）教鞭を取った方政雄を紹介された。山中の聞き取りの際にもたびたび出てきた名前であった。高校カリキュラムのなかに朝鮮語があること自体が珍しいなかにあって、正規教員を配置した教育を湊川高校は長く実施していた。その担当者が方政雄であった。

(2) 方は、聞き取りが一段落した後、湊川高校に案内してくれた。黄昏のなか新湊川に北接する湊川高校（昼は兵庫高校）の校舎と教室などの配置を教えられ、震災当時の状況についてもさまざまなエピソードとともに聞くことができた。山中の提供してくれた写真資料と撮影現場＝兵庫高校避難所の場所が一致した瞬間であった。

4. 「震災資料室展」協働参画から「学ぶ」

(1) 3年生ゼミで、夜間中学関係本を輪読

2016年度前期のゼミ授業のなかで、西野分校に関する文献を輪読することで理解を深める作業を行った。テキストは、『神戸市夜間中学校60年をふりかえって－第55回全国夜間中学校研究大会兵庫県大会展示から－』⁶⁾を使った。ゼミの学生とともに「夜間中学」西野分校の歴史を記録したテキストから多くの情報を得ることができた。その輪読の過程で、現西野分校において撮影を許

可されたパネル資料が第55回全国夜間中学校兵庫県大会において展示されたものと一致することがわかった。

そのなかの一枚に、元西野分校校舎取り壊しの際の写真パネルがあった（図7参照）。この解体された木造校舎の正面壁に設置してあったのが、震災資料室の「夜間中学の大時計」であった。あの「夜間中学の大時計」という資料とその資料の由来を把握できた瞬間であった。



図7 現西野分校所蔵のパネル資料

(2) 神戸市教育委員会から提供された元西野幼稚園平面図

2016年度震災資料室展に協力することになったため、今は無き三番町にあった西野分校の校舎図面が残っていないかと考え、神戸市教育委員会に打診した。その結果、提供されたのが、震災2年前校舎改修の際に作成された「平成4年度西野幼稚園改修工事平面図」（図8）であった。この

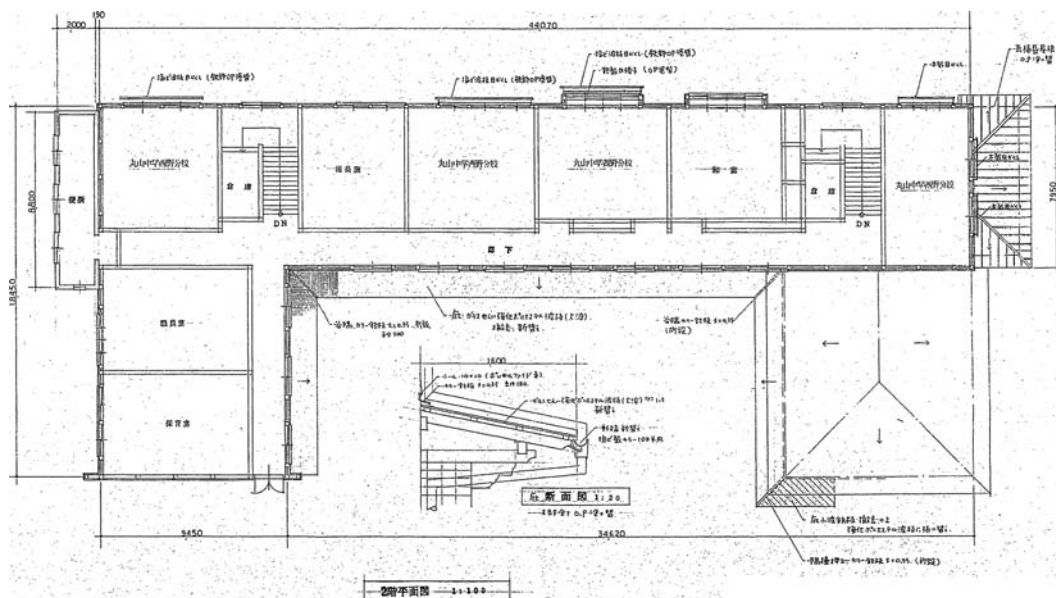


図8 平成4年度西野幼稚園改修工事平面図（神戸市教育委員会提供）の二階部分

図面によって、当時の西野幼稚園校舎の2階にあった西野分校の職員室及び教室などの配置が判明した。

(3) 桂寄贈写真のなかに西野分校職員室から書類を搬出する際の写真を見出す。

① (3) において、木村が震災当時の西野分校に関する「記憶」として強烈に記憶していた地震直後の西野幼稚園（全壊・危険立ち入り禁止）2階の西野分校から必死で書類を搬出する、まさにその瞬間を記録した写真（図9、この写真にはまったく説明文はない）が、桂の寄贈写真のなかにあり、倒壊した西野分校職員室から教材等を搬出する様子であることが判明した。



図9 地震被害を受けた西野分校職員室内部写真（右側の女性が桂）

(4) 2016年度震災資料室展への協働参画

2016年度震災資料室展で、西野分校をテーマに学生たちと協働して展示することになった。素材は、震災資料室のスタッフと協議した結果、①水本ゼミ生がゼミで輪読した成果、②震災資料室所蔵桂寄贈資料、③桂が主催する識字教室・ひまわりの会、④夜間高校・湊川高校を取り上げることに決まった。

そして、展示期間中に、三番町にあった時期の西野分校元教員を招聘して座談会を企画した。目的は、この座談会を通じて学生たちとともに夜間中学が行なってきた教育実践を元教員の口から聞くことであった。

協働展示企画のメインタイトルを、「長田には、夜間学校のすばらしい伝統が、今も続いている！」に設定し（図10参照）、以下のテーマをゼミ生が分担し学びの成果を展示することにした。

- ①揺籃期の小学校ー西野小学校
- ②丸山中学校西野分校の創立
- ③震災と西野分校
- ④夜間中学校の伝統は、識字教室「ひまわりの会」に継承
- ⑤夜間高校・湊川高校が地域と連携した「国際交流学習」を17年継続
- ⑥西野分校元教員による座談会「西野分校を語る」

長田には、夜間学校のすばらしい 伝統が、今も続いている！

神戸学院大学水本ゼミの「学び」

毎年、震災資料室展には、西野分校にあった「大時計」が展示されていました。いつから展示され続けているのか、定かに覚えていません。震災資料室と協働させてもらう機会を得て、今年初めて「丸山中学校西野分校と震災」をテーマに勉強させてもらいました。
今の学生たちは、あの震災を知りません。同時に、長田の夜間学校も知りません。夜間学校、地名・西野、西野小学校、丸山中学校西野分校、識字教室「ひまわりの会」、湊川高校をテーマに勉強しました。



図 11 座談会の様子

図 10 震災資料室展で提示した協働
展示の前文

この時の様子は、ビデオ撮影を行い映像記録として DVD 映像（『語り継ぐ記憶 神戸市立丸山中学校西野分校 夜間中学』として保存することになった。

5. 西野幼稚園跡地残留丸山中学校西野分校関係資料の発見

展示に際して、三番町の旧西野幼稚園跡地にゼミ生とともに何度も足を運んだ。22 年後も跡地は何らの用途も決まらず未だに更地のままである。その旧幼稚園校庭を取り囲む塀の内側に絵（図 12 参照）があることをゼミ生たちが指摘した。この絵を震災資料室の展示に使いたいということになり、神戸市教育委員会の了承のもと更地になっている旧西野幼稚園の跡地に入ることができた。

この撮影時に、正門から見て左側に一部だけ残ったコンクリート壁がある（図 13）。近づいて眺めると、コンクリート壁の空間の向こう側に何かがあることが判明した（図 14）。

このコンクリート壁は、神戸市教育委員会提供平成 4 年度西野幼稚園改修工事平図面（図 15 参照）で確かめると、元西野幼稚園遊戯室の南側の壁が 22 年前（調査時は 2016 年 10 月）の校舍解体工事中に中断してそのまま放置されたものであることがわかった。

神戸市教育委員会職員の立ち会いのもと、この残存するコンクリート壁を調査した。その結果、幼稚園校庭の外側を囲む塀と残存する遊戯室南側のコンクリート壁の間に倉庫があり、その倉庫の 1 室に 22 年前に幼稚園長の叱責を受けながら危険を顧みず搬出した資料が無残な姿で残っていた。倉庫の天井のスレートは長年放置されたためかあちこち穴が出来て雨漏りがしていた。倉庫の窓も開け放たれたままであり、入口の引き戸のガラスも完全に破壊され跡形もなくなっている状況のなかで、さまざまな資料などがまるで家捜しされた後のような無残な状態で残っていた（図 16）。



図 12 今も残る旧西野幼稚園校舎を取り囲む塀の内側に描かれた絵（秋の草刈りが実施される前であったため、前面に跡地に盛大に繁茂するセイダカアワダチソウが写り混んでいる。）



図 13 旧西野幼稚園遊戯室の南側のコンクリート壁



図 14 コンクリート壁を透かして内部を見た際に見えた何か

立ち会った神戸市教育委員会職員の了解のもと、調査・整理作業をするため、大学に搬入する作業を行なった。軽トラック 1 台分の資料を搬出した（図 17）。

大学に搬出した資料は、いずれも倉庫の水漏れによって濡れた状態であり、なかには水たまりに長年漬かっていたため、大部分が融解した状態のファイルも多くあった。その多くが黴と埃に汚れていた。とりあえず、乾燥作業と燻蒸を行なった（図 18）。

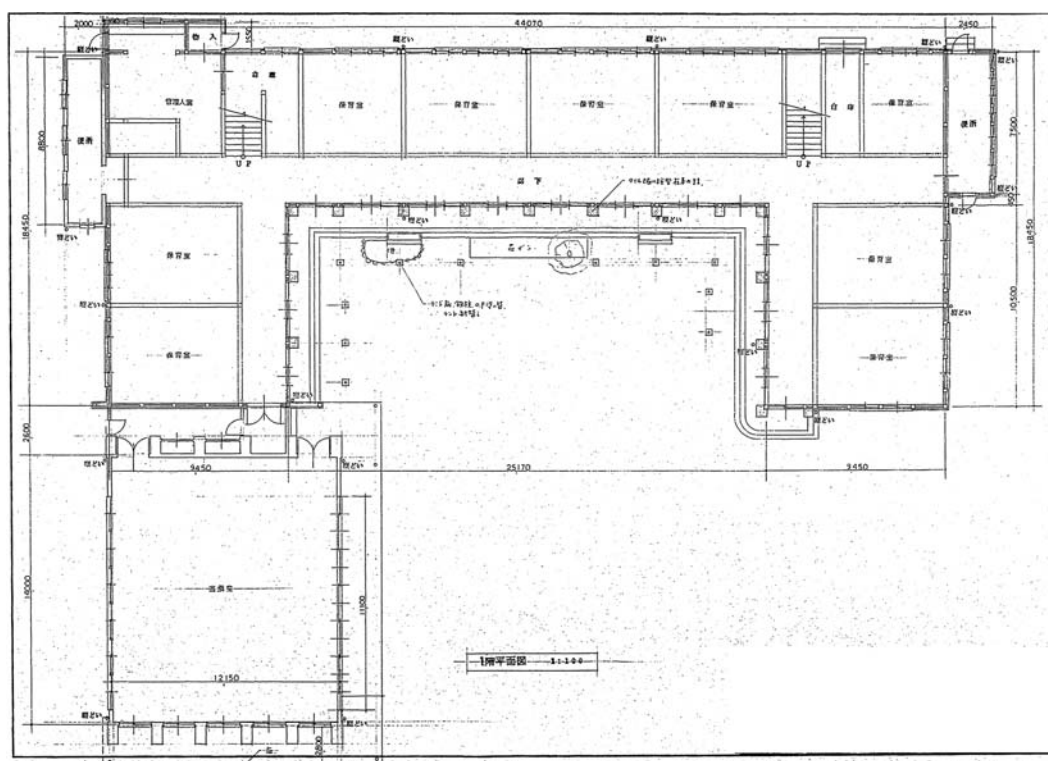


図 15 平成 4 年度西野幼稚園改修工事平面図（神戸市教育委員会提供）の一階部分
図面左側下に「遊戯室」があり、その南側壁が解体途中で残存（図 13）。この壁と外堀の間に後付けで倉庫（2 部屋）が作れていた。その第 2 室に図 16 の状態で西野分校関係資料が散乱していた。



図 16 調査直前の倉庫の内部



図 17 倉庫から無残な状態の資料を搬出する作業をする筆者及びゼミ生



図 18 乾燥と燻蒸のために搬入した部屋に拡げられた資料の状態

おわりに一夜間中学・西野分校「学び」の今と今後―

①地域をもっと知る必要性

旧西野分校があった番町地区をより深く認識することが今後の課題である。先学の著述した本を読んで理解するだけでなく、自ら歩き街を体験するなかで理解を深めていく。既に番町地区は、旧西野分校があった場所も更地になるなど、22年間のあいだに劇的に街の様子が変化している。しかし、その変化自体が番町地区の街の歴史であり、現在の街の様子から過去に遡る手法も必要であると考えている。

西日本随一の同和地区と喧伝された番町地区、今も密やかに囁かれる差別的な表現や認識、その事実も含めて深い認識と理解をしていく作業がないと、過去の番町地区を理解することにはならない。

元来南北に流れていた湊川は、明治末年に付け替えられ新湊川として東西に流路をねじ曲げられ、荻藻川と合流して駒ヶ林地区の東端を海に流れ込む。この湊川の付け替え工事と並行して地域の耕地整理が実施され、新町名が出現する。「番町」という新町名もその時に命名された。では、なぜ、「番町」という新町名がその地域に賦与されたのか。その理由も定かでない。今後の課題である。

②フィールド調査を学生の「学び」に結びつける

震災資料室と協働した展示の経験は、2017年度ゼミ生のなかから卒業研究（神戸学院大学人文学部では「卒業研究」という名称が賦与されている）のテーマとして設定する学生も出てきた。まさに、ゼミ生との協働による「学び」が4年生の卒業論文に向けたアプローチに繋がったといえる。

0（ゼロ）から出発した夜間中学・西野分校に対するアプローチは、今、様々な方面に放射状にテーマが拡大しつつある。震災資料ともいえる22年間ひっそりと朽ち果てるにまかされていた旧

西野幼稚園跡地残留西野分校関係資料も整理作業と内容把握をする必要がある。そして、さまざまな関係者との出会いと協力は、さらに新しい情報収集と分析という課題を出現させている。

現在、ゼミ生を中心に長田にあった夜間中学、番町地区に隣接する夜間高校、震災直後から20年以上続く識字教室などを含めた地域史研究を続けている。称して、「長田夜間学校勉強会（略して「夜勉（よるべん）」）。このささやかな「学び」の場が、長田区番町地区をより深く理解していくひとつの核となっていくことを願っている。

注

- 1) 兵庫県下には、3校の夜間中学（正式には、〇〇中学校夜間学級。兵庫県下にある3校は「分校」という名称が付いている。）が存在する。設立年代が古い順に、神戸市立丸山中学校西野分校（1950年創設）、神戸市立兵庫中学校北分校（1976年創設）、尼崎市立成良中学校琴城分校（1976年創設）。
- 2) 現存するパネル資料は、第55回全国夜間中学校研究大会実行委員会大会事務局「神戸市夜間中学校60年をふりかえって－第55回全国夜間中学校兵庫県大会展示から－」で見ることができる。その時の展示パネルが保存されていることは、神戸市の夜間中学の歴史を検討するうえで重要な手掛かりになる資料であり、それが保存されていることを奇貨としたい。しかし、教頭に由る選別を経て提示された資料であり、現西野分校にどれだけの関係資料が保存されているのかは判断することができなかった。また、ロッカー内に保存されていた生徒の文集『にしの』もガラス越しの閲覧のみで冊子を手にも取ることもできなかった。すべて、個人情報の保護のためであるとのことであった。
- 3) みずのわ出版（みずのわ文庫）、2001。登尾には、その他、『湊川、私の学校』草風館、1999。『それは、湊川から始まった』みずのわ出版、2004などがある。いずれも、36年間勤め続けた湊川高校での教育が基礎になった出版物である。
- 4) 2017年度も西野分校は「授業公開日」を設定している。しかし、この授業「公開」は、生徒の保護者と市内中学校教員にのみ限定的に「公開」する方針であり、筆者による参観は謝絶された。その理由は、過去に授業公開した際に生徒が「公開」を嫌ったことがあり、そのような生徒の感情に配慮するためだと教頭から告げられた。しかし、夜間中学の「授業公開日」の設定目的は、夜間中学に入学を希望しながら逡巡している可能性がある潜在的な入学希望者に対して、夜間中学の授業がいかに行なわれているのか、それを認知してもらうための行事であったのではないかと。そう考えると、西野分校の「授業公開日」の参加条件は、潜在的な入学希望者に向けてやさしく手を差し伸べるという夜間中学本来の姿を見失っているように思えてならない。
- 5) この聞き取り調査の成果は、「震災のなかの神戸市長田区番町地区を写した写真とその『記憶』」と題した別稿を用意している。
- 6) 第55回全国夜間中学校研究大会実行委員会大会事務局編、同事務局発行、2010

〔付記〕

本稿は、2016年度人文学部の研究推進費を交付された研究成果の一部である。人文学部研究推進費による研究発表会（2017年4月29日）において口頭報告した内容を基礎にしている。発表時に貴重な助言や教授をいただいた方々に深甚の謝意を称したい。